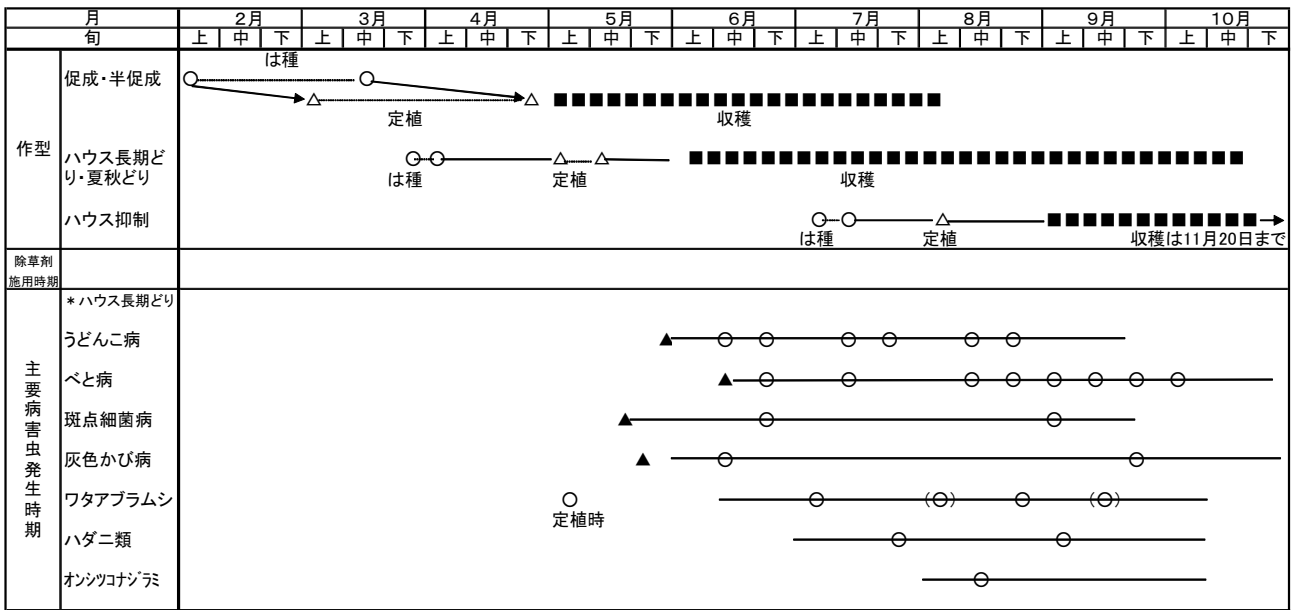


13 きゅうり

A 栽培管理カレンダー



【凡例】 作型図 ○は種、△定植(移植)、■収穫、▲その他栽培管理法等
 主要病害虫発生時期図: —発生時期、○基幹防除時期、(○)臨機防除時期、▲発生状況調査等 (○内数字は成分数)
 ◎同時防除(同一薬剤で複数の病害虫を対象) (◆)条件付き防除
 注)各作型の月旬は道央地帯を主としているので、道南、道東北地帯は前後する。

B 主なクリーン農業技術の概要

(1) 土づくり

- 基盤整備
 - ・排水対策の実施
- 有機物の施用
 - ・たい肥(4t/10a)施用を基本とした土づくり
- その他
 - ・亜酸化窒素ガス放出削減対策として高温期の白マルチ使用、完熟たい肥を窒素施肥1週間以上前に施用、冬期間の被覆ビニール除去

(2) 施肥管理

- 土壌診断による施肥の適正化
 - ・土壌診断を行い、その結果を活用した「施肥対応」等による適正施肥
 - ・下層土の硝酸態窒素含量診断結果の活用による追肥(第1回目)要否判断
- 有機物の肥料評価による施肥の適正化
 - ・有機物由来窒素の評価による施肥窒素削減

(3) 雑草の防除

- 有色マルチの使用、隙間のないマルチの展張(除草剤は使用しない。)
- (雑草がマルチ穴等より発生した場合)速やかに手取り除草

(4) 病害虫の防除

- 発生モニタリングによる効率的防除
 - ・見取り観察(ハダニ類、ワタアブラムシ)、粘着トラップ(オンシツコナジラミ)による発生モニタリングで、発生に対応した効率的防除
- 化学的防除の効率化
 - ・べと病対策としてくん煙剤の利用(多湿時)

- ・べと病の後半防除打ち切り時の適期判断（11月上旬に終わる作型では、その30日前にべと病に対する薬剤散布を終了可能）
- 物理的防除
 - ・つる割病対策として太陽熱消毒の実施
- 生物的防除
 - ・ウリノメイガ（鱗翅目）への生物農薬（BT剤<生菌>）の利用
 - ・ハダニ類、ワタアブラムシ、オンシツコナジラミ、うどんこ病に対して生物農薬を主体とした防除
- 耕種的防除
 - ・うどんこ病抵抗性品種の利用（薬剤防除は3回に1回へ散布回数を削減可能）
 - ・全面マルチ、排水性の向上によるハウス内湿度抑制、及び側窓・天窓の開放、低い栽植密度による通気性改善（病害<べと病、菌核病、斑点細菌病>の発生を抑制するとともに天敵に有利な温度条件とする。）
 - ・ハウス周辺の雑草や作物残さ除去の徹底による病虫害発生源除去
 - ・斑点細菌病対策として、多窒素栽培を避け、収穫後は茎葉をていねいに集めて焼却処分
 - ・オンシツコナジラミ、ミカンキイロアザミウマ対策として、寄生した苗・植物を持ち込まない、前年にこれらが発生したハウスでは冬期間ビニールを除去
 - ・センチュウ対策として、対抗植物の利用
 - ・適正施肥量の遵守による過繁茂抑制
 - ・サツマイモネコブセンチュウ対策として、対抗植物の利用

（5）植物成長調整剤の使用

使用しない

C 栽培に当たっての留意事項

- 発生が少ない害虫類（ヨトウガ等の蛾類等）は、発生を随時観察するにとどめ、できるだけ薬剤防除は行わないこと。
- 生物農薬利用時に他病害虫に対する防除を実施する際は、天敵に影響の少ない薬剤を選択すること。

D 栽培に当たっての禁止事項

なし

E 肥料及び化学肥料の使用基準

分類	慣行		使用基準						
	化学肥料施用量 (kg/10a)	総窒素施用量 (上限値、kg/10a)		たい肥等施用量 (下限値、t/10a)	化学肥料施用量 (上限値、kg/10a)				たい肥施用量 (上限値、t/10a)
		基肥	追肥/1回		追肥回数	窒素量	追肥回数	窒素量	
ハウス	42.0	25.0	5.0	4.0	1回 2回 3回	19.0 24.0 29.0	4回 5回 6回	34.0 39.0 44.0	—

- 注1 窒素肥沃度水準「低」の場合の基準である。
ただし、化学肥料施用量は窒素肥沃度水準「中」の基準を上限とする。
- 注2 総窒素量上限値＝基肥＋1回あたり追肥量×回数
- 注3 追肥回数＝収穫期間・回/20日
- 注4 たい肥1t当たり1.5kgの窒素換算量とする。ここでのたい肥とは、「牛ふん麦稈たい肥」「牛ふん敷料たい肥」を指す。
ただし、ふん尿割合の高いたい肥を利用する場合は1tあたり2kgの窒素換算量とする。
- 注5 たい肥等施用量下限値は、たい肥に相当する有機物での対応も認めるものとする。
- 注6 たい肥施用量は輪作内での平均値も認める。

F 化学合成農薬の使用基準

(単位：成分使用回数)

作型	慣行							使用基準											
	殺菌剤		殺虫剤	殺虫・殺菌剤	除草剤	植調剤	計	殺菌剤		殺虫剤		除草剤		植調剤		計			
	(種子消毒)	基幹						基幹	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機
			(種子消毒)	臨機															
促成・半促成	28	(0)	12	0	0	0	40	6	(0)	0	1	4	0	0	0	0	7	4	11
ハウス長期どり・夏秋どり	20	(0)	12	0	1	0	33	18	(0)	0	6	2	0	0	0	0	24	2	26
ハウス抑制	26	(0)	19	2	2	0	49	18	(0)	0	5	3	0	0	0	0	23	3	26

注1 使用基準は剤別（殺菌剤・殺虫剤・除草剤・植物成長調整剤）及び基幹・臨機防除別に記載
 基幹防除：平均的な病害虫の発生状態を考慮した場合、ほぼ毎年行う必要がある防除
 臨機防除：突発的な病害虫の発生や、地域や品種により発生状態が異なる病害虫に対して行う防除

注2 種子消毒は殺菌剤の内数とする。

注3 生産集団の栽培基準における化学合成農薬の使用回数は、使用基準の合計回数を下回るものとする。

注4 使用基準における化学合成農薬の剤別の使用回数は、地域の栽培実態に合わせ変動して差し支えない。

【参考：作型（地域別）】

作型	道央地域						道南地域						道東・道北地域					
	は種期		定植期		収穫期		は種期		定植期		収穫期		は種期		定植期		収穫期	
	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終
促成・半促成	2/1	3/15	3/1	4/25	5/1	7/31	2/1	3/5	3/1	4/15	5/1	7/20	2/1	3/20	3/1	4/30	5/1	7/31
ハウス長期どり・夏秋どり	3/25	4/1	5/5	5/10	6/5	10/20	4/1	5/5	5/10	6/10	6/15	10/20	3/25	4/1	5/5	5/10	6/5	10/20
ハウス抑制	7/5	7/10	8/1	8/5	9/1	11/20	7/10	7/15	8/5	8/10	9/5	11/30	7/1	7/5	7/25	7/31	8/25	11/10

注1 道央地域：石狩、後志、空知、胆振、日高管内とする。

道南地域：渡島、檜山管内とする。

道東・道北地域：上川、留萌、十勝、網走、釧路、根室管内とする。

注2 作型は地域別の平均的な昨期を示したものであり、地域の栽培実態により当該期間が前後する場合がある。

G 注釈

●土壌診断による施肥の適正化

硝酸態窒素の分析を行い（定植前もしくは播種前）、窒素肥沃度に応じた施肥を行う。

●ミカンキイロアザミウマ対策

寄生苗等の持ち込みに注意し、早期発見と化学的防除により密度抑制し、冬期間のビニール除去による越冬阻止により総合的に防除を行う。冬期間の被覆ビニール除去が越冬を阻止する確実な方法であるが、側窓を開放し-10℃以下で168時間以上を確保できれば越冬を阻止できる。

●サツマイモネコブセンチュウ対策として、対抗植物の利用

根こぶ形成抑制効果を有する対抗植物として、ソルガム「SS701」及びギニアグラス「ソイルクリーン」が有効である。対抗植物のすき込みは適期（約60日）に行い、腐熟期間は十分にとる。